

薪能

令和元年

8/24

午後5時30分開始

(午後4時30分開場)

岩村城藩主邸跡 (雨天 岩邑中学校体育館)

番組

仕舞 [八島] 源義経 内藤飛能
[砧]後 貞盛の妻の 和久庄太郎
地謡 地謡 辰巳 耕司

能 [楊貴妃] 楊貴妃 玉飯井博祐
玉簾 方里人 飯井市 雅介
笛 小鼓 後見 大鼓 後見 地謡

井富上 藤村島黒巳 藤久藤巳 片桐永水 嘉津幸 眞之介 克実 満次郎 耕司 飛能 大二郎 眞滉 達郎

狂言 [仏師] 素つ破 井上松次郎
田舎人 藤上 融
後見 井上 蒼大

能 [野守] 前野守の翁 辰巳 満次郎
白頭 後 鬼 橋本 幸裕
羽黒山の山伏 鹿島市 俊学
里人 竹市 嘉津幸
笛 後藤村 裕一郎
小鼓 河加藤 洋輝
大鼓 竹内 澄子
後見 石黒島 美都
地謡 佐藤久 耕司
和内藤 飛能
石片森 智幸
能中 勢村 成利

能「楊貴妃」について

唐の玄宗皇帝は安祿山の乱で殺された楊貴妃を忘れられず、方士に魂のありかを探そう命じます。方士は天上から黄泉まで訪ね歩き、蓬萊宮にて居場所を聞き出し、太真殿という御殿にて楊貴妃に出会います。

方士は楊貴妃と出会った証拠が欲しいと言うので髪に挿していた釵(かんざし)を渡しますが、それでは証拠にならないと言い、二人の間で交わされた言葉が聞きたいと頼みます。楊貴妃は七夕の夜、玄宗皇帝との間で変わることのない愛を交わした言葉を伝えます。もともと天上界の仙女であった身の上を語り、昔を懐かしみながら思い出の舞を舞うのでした。その後、釵を携えて都へ帰る方士を見送り、悲しみに沈むのでした。

狂言「仏師」について

自宅に持仏堂を建てた田舎者が仏像を求めて都へ出かけます。仏像を買いたいことを言いまわっていると仏師だと嘘をついたすっぽ(詐欺師)が翌日には出来上がると言います。

翌日、たずねると仏像が出来上がっています。印相が気に入らないので直してもらおうとすると仏師はあわてて現れ、「直った」と言います。再び見に行くと直してもらおうとすると大変あわてて現れる仏師。実は仏師が成りすましていた仏像だったのです。手直しを繰り返していくうちに……。

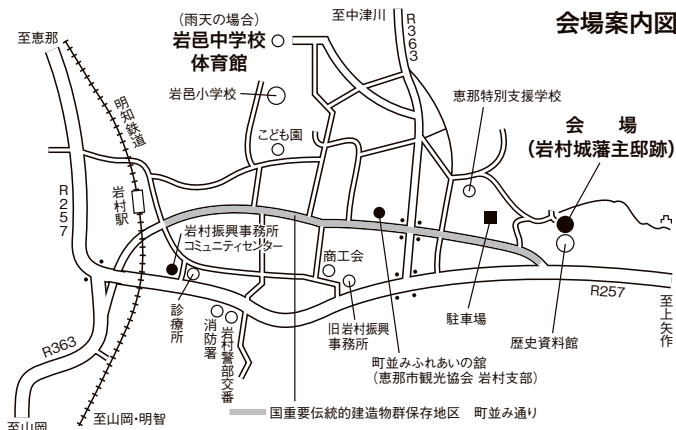
能「野守」について

出羽国(山形県)の羽黒山からやって来た山伏が、大峰葛城山へと急ぐ途中、大和国(奈良県)の春日野に着きます。そこへ一人の老人が現れたので、このあたりの里人かと問うと、老人はこの場所の野守だと答えます。そこで、山伏はこの傍らにあるいわれのありそうな池について尋ねます。老人は、朝な夕な私のような野守が姿を映すので、この池は「野守の鏡」と呼ばれているが、本当の「野守の鏡」というのは、昼は人となり、夜は鬼となってこの野を守っている鬼神の持っている鏡のことだと答えます。

さらに、「箬鷹の野守の鏡 得てしかな 思い思わず 外ながら見ん」の歌(新古今集)(はし鷹の野守の鏡がほしい。あの方が自分を思っているか思っていないかを見たいから)について尋ねると、老人は、昔この野で御狩があったとき、御鷹が逃げてしまいました。しかし、鷹の姿が水に映ったので行方がわかったということからその歌が詠まれたのだと語ります。

山伏がまことの「野守の鏡」を見たいものだと言っていると、老人は鬼神の持つ鏡を見れば恐ろしく思うであろうから、この水鏡を見るようにと言い残して塚のなかへ姿を消します。

山伏は、里人に塚の鬼神が野守の姿で現れたのでであろうと云われたので、この奇特を喜んで塚の前で祈っていると、鏡を持った鬼神が現れ、鏡に東西南北天地を映して見せた後、大地を踏み破って奈落の底へと消えて行きます。



お問合せ先

町並みふれあいの館内(恵那市観光協会 岩村支部)
いわむら城址薪能実行委員会

電話 0573<43>3231

〈JR利用の場合〉 名古屋 $\xrightarrow{\text{快速約60分 中央西線}}$ 恵那 $\xrightarrow{\text{約30分 明知鉄道}}$ 岩村 $\xrightarrow{\text{徒歩20分}}$ 会場

〈マイカーの場合〉 名古屋.I.C $\xrightarrow{\text{約40分 中央自動車道}}$ 恵那.I.C $\xrightarrow{\text{約15分 国道257号線}}$ 岩村町(会場)

- 駐車場/恵那特別支援学校グラウンド(係員の指示に従ってください)
- 岩村町内は一方通行が多いので注意してください。● 座布団をご持参ください。
- 午後7時を過ぎますと涼しくなります。上着等をご用意ください。
- 雨天の場合/会場を岩邑中学校体育館に変更して行きます。